

contents

第14回性科学セミナー報告……………	1	「ありのままのわたしを生きる」ために③③……………	9
性教育の歴史を尋ねる⑨……………	7	今月のブックガイド……………	10
北丸雄二のニューヨークレポート③③……………	8	JASEインフォメーション……………	11

■第14回性科学セミナー報告

日本の性のデフレーション

——克服への提案——

第14回性科学セミナーが9月14日(土曜日)午後1時より横浜市社会福祉センターホールで「日本の性のデフレーション—克服への提案」をテーマに開催され、各専門分野からの講演が行われた。同時に同じ会場で、第4回世界性の健康デー(WSHD)記念イベントが「性の健康を達成するために、あなたの性の権利をイメージしよう」をテーマに開催された。

性科学セミナーの冒頭、日本性科学連合の大川玲子会長から、開会の挨拶とテーマの趣旨説明ののち、6名の講師が今井伸氏(聖隷浜松病院泌尿器科)、大石時子氏(東京医療保健大学大学院看護学研究科)両座長のもとで、各専門分野の講演を行った。以下、その概要を報告する。



性行動の国際比較と日本人の射精頻度

日本性機能学会の専門医・事務局長・副理事長でもある永尾光一氏(東邦大学医学部泌尿器科教授・東邦大学医療センター大森病院リプロダクションセ

ンター長)は、中高年の男性の性行動を中心に「性行動の国際比較と日本人の射精頻度」をテーマに2つの調査結果について報告した。

最初の報告は、2006年に28か国を対象に行われた「性に対する態度および性行動に関する Pfizer Global Study」の調査について。

その調査をまとめると日本人の性行動は、以下のような結果となっている。

- ①平均寿命が81歳と28か国中トップなのに、健康感、良好以上が55%と下から3番目。
- ②セックス(性交渉)が重要と回答したのは53%と28か国中、下から3番目。
- ③最近12か月間に、セックス(性交渉)をしたのは68%で28か国中、下から8番目。
- ④最近12か月間に、セックス(性交渉)回数は、28か国中最低、月1回未満が最も多かった。
- ⑤過去3年間に医師から性機能障害について尋ねら

れたのは1%で28か国中最低。

- ⑥過去12か月間に医師に性機能障害について相談したのは9%で28か国中、下から4番目。

- ⑦最近12か月間に、パートナーとの関係で肉体的な喜びを感じたのは、57%で28か国中最低。

- ⑧最近12か月間に、パートナーとの関係で精神的な満足感を得られたのは、65%で28か国中最低。

ちなみに、2005年に行われた「性交頻度国際比較」調査によれば、日本人の性交頻度は世界21か国中で最低で、世界平均の半分以下であるという。

引き続いて、2009年3月19日～5月31日にかけて、20歳～69歳の男性7,710人に対してインターネットを通して行った「日本人の性交頻度・射精頻度の調査」結果について報告された。

日本人男性の1年間の性交経験者は約70%、マスターベーション経験者は約90%であった。射精頻度は性交で月2回、マスターベーションで月5.5回、計月7.5回で、20歳から50代までは性交による射精よりマスターベーションによる射精が多いという。マスターベーションを含む月7.5回という数字は、世界性交頻度の平均月8.5回に近い頻度である。マスターベーションに関しては、独身男性のほうが既婚者より多く、既婚者の場合子どもの有無での頻度には、差がなかったという。一方、子どもの有無による性交頻度は、20代で子どものいないほうが育児希望のため性交頻度が高い、しかし、30代以降では子どもがいるから、子ども中心の生活になるから性交頻度が減るという傾向は見られない。

「日本人男性の結婚の有無による性交頻度は、20代から50代、とくに20代で既婚者の性交頻度が高いが、60代では独身者の性交頻度が高いという結果です。妻の性交に対する協力度では、60代が最低になるので、60代の独身男性のほうが性交機会が多くなるのかもしれませんが、また、EDの有病率は年齢とともに高くなりますが、ED治療薬を使えば70代男性でも71～78%の確率で性交が可能で、いまや高齢者は若い人と同じ性交能力があります。



高齢者も性感染症が増える危険性があるので、コンドームの着用が必要です」という。

この調査で、男性がセックスレスになる原因として、配偶者にセックスを拒まれることによることが分かったという。

性感染症におけるパートナー検査の現状と課題

日本性感染症学会代議員で独立行政法人国立国際医療研究センター国際感染症センター感染症対策専門職の堀成美氏は、「性感染症におけるパートナー検査の現状と課題」をテーマに講演をされた。講演内容は、「性感染症の検査・診断契機としてのパートナー健診の実施状況、阻害因子・促進因子の把握」を目的に行われた2つの調査の報告である。



調査1は、インターネットによる調査で、15歳から69歳の男女18万7,617人に協力を依頼し、4.6%の約8,700人の回答を得たもので、パートナーの性感染症罹患を契機として受診したのは、男性では10代、30代、20代の順、女性では、50代、60代、30代の順に多かったという。また、「性感染症の罹患を相手に伝えたか」という設問では、「伝えた」という回答は、全体で58.1%（男性47.8%、女性62.9%）で、30代男性に「伝えなかった」という回答が多かったという。

調査2は、国内31か所の医療機関（産婦人科）の同意が得られた15歳以上の受診者2,929人（女性2,824人）に自記式質問調査を行った結果である。

「女性患者が性感染症の検査を決断したきっかけ」に関する設問では、「症状があった」が53.3%、「医師の勧め」が20.5%、「パートナーが性感染症に感染」が10.4%、「パートナーがかわったから」7.3%、また罹患者のうち、パートナーに性感染症の罹患を告げたのは75.8%であったという。

「誰に言われたら検査を受けるか」という設問では、恋人や配偶者が69.3%、医師・看護師が15.9%、親・兄弟姉妹5.5%という結果が出ている。

わが国の HPV と Chlamydia と HIV の疫学的検討

財団法人性の健康医学財団の評議員で国立保健医療科学院統括研究官の今井博久氏は、「わが国の HPV と Chlamydia と HIV の疫学的検討」というテーマで、最新の調査結果を報告された。



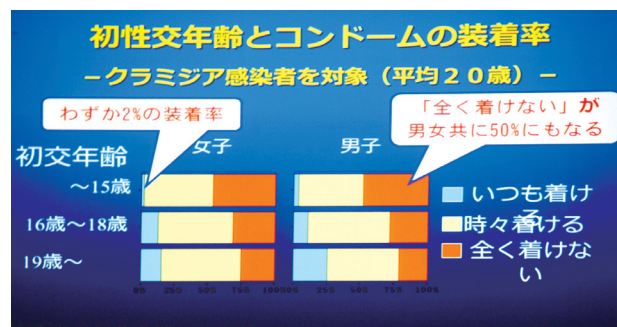
最初の報告は、HPV 感染の疫学調査で、2011 年から 2012 年に 20 歳前後の女性を中心にわが国で最初に実施したコミュニティ・ベースの本格的な疫学調査である。これまでの HPV の罹患率の調査は、すべてホスピタル・ベースであり、どうしてもバイアスが生じ正確な疫学情報を得られない状況にあったと述べられた。

調査対象者は、1,200 人で、770 人が性交渉経験者で、子宮頸がんの発生率の高いハイリスク HPV 感染者は、20%弱という結果であったという。この調査については、論文投稿中で詳細については触れられなかったので、詳細発表を期待したい。

続いて、クラミジア感染に関する同じくコミュニティ・ベースの調査結果を報告された。この調査は、18 歳以上の教育機関に在籍する無症状の男子学生 397 人、女子学生 607 人計 1,004 人を対象に行われたものである。

このうち性交経験のある学生は男子 284 人、女子 451 人計 735 人 (73.2%)。性交経験のある学生の年齢分布は、男性は 19 歳、女性は 20 歳が最も多い割合で、それぞれ 33.7%、20.2%であった。性器クラミジア感染の有病率は 8.3% (男性 7.0%、女性 9.1%) という結果が出たという。性器クラミジア感染者の初交年齢の感染率は中学校デビュー者が 18%で、高校、大学デビューの約 3 倍という高い数値を示した。質問票でのコンドーム装着率によれば、中学校デビューのうち男女とも 50%以上が未装着であったという結果を示された。

この結果を踏まえて今井氏は、一連の調査結果から具体的な対象を検討すると、まず性感染症の



蔓延防止対策の実施に向けて、「①対策の焦点を当てるべき対象者をティーンエイジャー、中学 3 年生や高校 1 年生とすべきである。②性別、年齢、危険因子が明らかになったので、こうしたデータに基づいて蔓延予防対策の施策を実施することが期待される。③今後は、各省庁や地元医師会、関係学会、学校教育関係者等が協力し合って緊急に対策を講じる必要がある」と講演を締めくくられた。

中高年のセクシュアリティ — 2 回の調査から

日本性科学会セクシュアリティ研究会代表の荒木乳根子元田園調布学園大学教授は、「中高年のセクシュアリティ— 2 回の調査から」と題する日本性科学会セクシュアリティ研究会が行った調査について報告された。

調査は 2000 年 (1999 年 10 月～2000 年 3 月) と 2012 年 (2011 年 1 月～2012 年 12 月) の 2 回で、両調査とも関東圏に在住する 40 歳～79 歳までの配偶者のいる男女。2000 年の有効回答が 1,020 人、2012 年が 863 人である。

2000 年調査と 2012 年調査の比較から、性行動については、次のような変化がみられるという。

①配偶者間の性交頻度は男女とも、どの年代でも大きく低下しており、月 1 回以上の性交渉がある割合は、全体では男性は 53% から 24% に、女性は 53% から 26% に減少していた。配偶者と 1 年間まったく性交していない人が、全体では男性が 25% から 46% に、女性が 23% から 47% に増えて



いる。

- ②マスターベーションは「しない」という人が減少し、する人の割合が増え、全体では男性が20%から41%に、女性は8%から10%に増えている。

また、夫婦間の関係性や性についての意識では、以下のような変化がみられたという。

- ①配偶者との「望ましい性的関係」については、「性交渉を伴う愛情関係」を求める人の割合が男女とも減少し、全体では男性が55%から48%に、女性は36%から24%と減少している。

- ②「自分が配偶者以外の異性と親密な付き合いをすることにについてどう思うか」という性規範については、「付き合うべきではない」という意識が、男性は45%から28%に、女性は55%から49%に低下し、逆に「性的関係がないならかまわない」「家庭に迷惑がかからないならかまわない」という意識が増加したという。とくに後者の増加が目立ち、男性は17%から33%に、女性は6%から14%と増加している。

荒木氏は、調査の比較分析を以下のようにまとめた。

「この12年間で中高年のセックスレスが大幅に増加しています。しかし、若い頃と比較した性欲については両調査では、大きな差はみられないので、性欲自体の減少ではなく、セックスレスの代償行為としてのマスターベーションが増加していると考えられます。また、配偶者以外の異性との親密な付き合いが増えており、一部は性交渉が配偶者以外との付き合いに流れていると推測できます。性規範が変化してきて、必ずしも夫婦間の性生活を重視せず、自由な男女関係を求めるようになったともいえるのかもしれません。しかし、目指したいのは夫婦がコミュニケーションを深めて、共に満足できる性関係を作り上げることではないだろうか」と。

消極化する高校生・大学生の性行動の日常 ——第7回青少年の性行動全国調査から

日本性教育協会「青少年の性行動全国調査」委員会委員の渡辺裕子駿河台大学経済経営学部教授は、「消極化する高校生・大学生の性行動の日常——第7回青少年の性行動全国調査から」と題して、1974

年から日本性教育協会がほぼ6年間隔で実施してきた「青少年の性行動全国調査」について講演した。

講演の内容は、「性行動の30年間の変化」と「性行動の分化をもたらす要因」について。



「性行動の30年の変化」については、「Ⅰ. 恋人以外と性交・交際する」、「Ⅱ. 恋人と性交をする」、「Ⅲ. 恋人はいるが性交はしない」、「Ⅳ. デート経験はあるが現在恋人なし」、「Ⅴ. 恋人もデート経験もなし」の5つのタイプに分類し、その年次変化を分析したもの。

2011年についてみると、高校生では男女ともに「Ⅴ. 恋人もデート経験もなし」が、それぞれ45%、39%で最も多く、次いで「Ⅳ. デート経験はあるが現在恋人なし」で、それぞれ34%、32%であったという。一方、現在付き合っている相手や性交している相手がいるのは、男子で2割、女子で3割で、このうち、「Ⅰ. 恋人以外と性交・交際する」のはごく少数で、「Ⅱ. 恋人と性交をする」と「Ⅲ. 恋人はいるが性交はしない」に分かれる。男子では、タイプⅡは6%、タイプⅢは14%で、性交をしない場合が多い。これに対して女子では、タイプⅡが14%、タイプⅢが13%で、性交をするとしなは半々であるという結果であることをグラフを示しながら解説された。

大学生では「Ⅴ. 恋人もデート経験もなし」が減少し、「Ⅳ. デート経験はあるが現在恋人なし」が最も多く、現在つきあっている相手や性交している相手がいるのは、男女ともに4割で、高校生と同様、大学生においても「Ⅰ. 恋人以外と性交・交際する」は少数で、5%以下となっている。

過去30年間の変化をみると、高校生では「Ⅴ. 恋人もデート経験もなし」が一貫して最も多いタイプで、1981年から2005年までは次第に減少してきたが、2011年では再び増加している。一方、「Ⅱ. 恋人と性交をする」は逆に女子は2005年をピーク、男子は1999年をピークとして、再び減少に転じ、2011年には付き合いの質的な変化も生じ、男子で

3-4. 性行動のタイプの変化：まとめ

- ・「Ⅰ. 恋人以外と性交・交際する」のは、いつの時代でもごく少数である。
- ・高校生では「Ⅱ. 恋人と性交する」が減少し、「Ⅲ. 恋人はいるが性交しない」が再び多数派になりつつある。大学生でも、Ⅲが再び増加する兆しがある。
- ・「Ⅴ. 恋人もデート経験もなし」も、再び増加する傾向がみられる。



活発なタイプの減少と不活発なタイプの増加＝消極化

は「Ⅲ. 恋人はいるが性交はしない」が「Ⅱ. 恋人と性交をする」よりも多くなり、女子においてもほぼ同割合となったという。

学校段階を問わず、日常的に性交関係があるタイプⅠ・Ⅱは、男子では1999年以降、女子では2005年以降、減少し、2011年では、高校生男子で7%、女子で16%、大学生男子で32%、女子で34%となっている。

性行動の5つのタイプから捉えた場合、恋愛とは無縁の者だけでなく、恋人がいても性交をしない者の増加がみられ二極化というよりも、全般的な消極化が生じているという。

交際期間と性交渉の関係については、高校生男子では交際期間「1年未満」までは、相手と性交するのは2～3割、2年以上を経過しても、男女とも性交をするのは6割にとどまり、4割程度がプラトニックな関係を維持し続けていると分析している。大学生では、4割程度が1か月未満で性交をし、1年を経過した後もプラトニックな関係にとどまるのは、1割と少数であるという。

休日の勉強時間と性行動のタイプ面の分析では、性交関係のある生活をしている者は「休日の勉強時間0分」が明らかに多いという。

自己肯定感と性行動の関連という側面からみると、性行動に消極的な青少年には、自己に対する評価が否定的であるという傾向がみられ、自己を肯定できない者は相手から拒否されるリスクを意識するため、性や恋愛に関して積極的な行動をとらないと分析してる。

渡辺氏は、まとめとして次のように述べられた。

「今日の高校生・大学生は、友人のレベルでは異性への抵抗感が少なくなっているにもかかわらず、

日常生活での性行動は消極化しています。その原因の1つは、学業や就職の位置づけが相対的に高まり、性や恋愛がリスクとして捉えられるようになったためと考えられます」。

商品化される子どもたちの性

日本思春期学会理事で『季刊セクシュアリティ』編集長でもある金子由美子氏（埼玉県公立中学校養護教諭）は、「商品化される子どもたちの性」と題して、子どもたちの性について講演された。



恋愛における大人と子どもの境界線は、なくなってきている一方で、子どもたちの恋愛体験は脆弱で精神的に幼い子どもの失恋は、相手への憎しみや怒りの感情のコントロールが難しく攻撃的になったり、自暴自棄になる傾向がみられるという。そのような子どもたちに対し、学校での性教育は、からだの変化や月経・射精の生理には触れるが「恋愛」について学習する機会は、まったくといってないのが現状である。

金子氏は、「活字離れの進み中、恋愛小説は読まず、結果的に子どもたちの恋愛知識の情報源は、携帯小説、コミックス、テレビドラマなどのメディアに偏重し、『恋愛＝カップル＝幸せ』とか『恋愛＝セックス』というパターン化した恋愛願望や恋愛至上主義にあおられています。その問題点は、避妊や性感感染症予防、ノーバイオレンスなどの科学的情報がほとんど扱われていないことです。自分や相手の『こころ・からだ・性』を大切に思うことのできない未熟な恋愛は、時として相手をコントロールする支配的欲求だけが高まり、デートDVやストーカーなど、犯罪に結びつく危険性があります」と語る。

学校現場は、2003年からの性教育バッシングにより、中学校では、コンドームやピルを扱う性教育はできないのが現状であるという。そんな中、保健室には、「乳幼児検診と違って、どこでやってるのかわからない。保健室でしてくれればいいのに」といった「ヤンママ」からの相談も舞い込んでくると

いう。

金子氏は、現在の子どもたちを取り囲む「性の商品化」の現状を具体的な事例を挙げて紹介され、最後に次のように、学校での性教育の重要性について強調された。

「性教育は家庭で、という声も聞かれますが、子どもたちの性をターゲットにした商品化がはびこる現状においては、学校での性教育に期待するしかありません。教育とは、すべての人が同質で同等に得られる権利なのであり、性教育も例外にしてはならない」と。



休憩をはさんで、講師の皆さんと会場の参加者とのディスカッションが行われた。

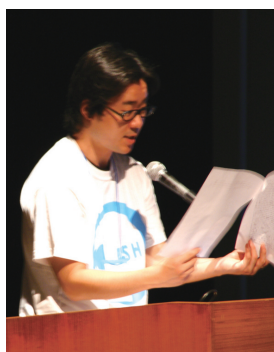
東京性教育研修セミナー 2013 夏報告

第4回 WSHD 記念イベント in 横浜

「性の健康を達成するために、あなたの性の権利をイメージしよう」

午前中は、ホールで『『みらいを紡ぐ若者たちへ』～大切なあなたに伝えたい“性の健康”』という朗読発表会が開催された。

さまざまな体験から気づいた性の健康を、後輩や次世代を担う若者、子どもたちへ伝えようという企画で、事前に性の健康に関する作品を一般募集した。



その中から 13 の選考作品の朗読が行われた。

内容は、子どもの頃の性被害、夫婦のセックスレス、婚外恋愛、触れあうことの喜び、マスターベーション、LGBT などテーマは多岐にわたるものであった。

午後はブース出展会場で、トークショー「7人の女達が語る、自分らしいセックスへの道のり」を開催。7人の女性がそれぞれの立場から、今のセックスライフについて語った。失敗や傷つきやキツイこともあったけど、豊かな性にたどり着いている女性たちひとりひとりが体験を語った。

食、運動、癒し、コミュニケーション、ココロと身体の健康についても自分磨きをしてきた彼女たちの経験と知恵の数々、また会場の参加者からも質問を受け、インタラクティブなトークショーであった。



ブース会場では、午前と午後に2回それぞれの団体や企業が活動報告やブース案内をし、参加者との交流とともに、団体同士の交流も活発に行われた。

〔プログラム〕

終日：ブース出展

午前：『『みらいを紡ぐ若者たちへ』～大切なあなたに伝えたい“性の健康”』～作文朗読

午後：トークショー「7人の女達が語る、自分らしいセックスへの道のり」

ブース出展団体は以下の通り。

リプロセルフバンク、JAS 日本性の健康協会、ロイマリーズ、Queen & Ally、TENGA、WILDONE、グリーンハート、SWASH、ユーズ、横浜 AID 市民活動センター、漢方薬局気生。

性教育の歴史を尋ねる

戦後・純潔教育編

茂木輝順

第9回 純潔教育委員会の活動(その2)

もてぎ てるのり
女子栄養大学大学院栄養学
研究科保健学専攻博士後期
課程修了、博士(保健学)

前回述べたように、文部省純潔教育委員会(以下、委員会)は、結果的に1949年1月28日に通牒される「純潔教育基本要項」(以下、「要項」)の作成をすすめる一方で、性教育に関する小冊子を準備していました⁽¹⁾。1948年7月12日には、山室民子(委員会委員・文部省視学官)とJohn M. Nelson(CIE Adult Education Officer)が会見を行い、安藤画一(委員会委員・慶応大学教授)が執筆している性教育の小冊子について議論しています。山室は委員会が安藤執筆の小冊子を安藤個人の成果として出版するべきだと考えていることと、その小冊子に委員会が教師や団体での使用に適しているという推薦を付けるだろうと報告しています。7月16日には、安藤、山室、Nelsonによる会見が持たれ、Nelsonは小冊子の細部にわたって加筆や修正点を提案したようです。ところが、「要項」も小冊子もなかなか公表には至りません⁽²⁾。

9月10日の山室とNelsonの会見では、「要項」の出版と学校への頒布について、CIEのEducation Divisionが承認したことが山室に告げられたものの、Nelsonは、理念(statements)がいくぶんあいまいなせいで要項(the document)の意義が無くなる(meaningless)と指摘し、数か所を再考し改訂して、頒布の前に再提出したらどうかと提案しています。10月4日には、委員会が先日もらった指摘を現在、検討中であることを山室がNelsonに報告しており、「要項」の改訂についてはあまり進展がみられなかったようです。業を煮やしたのか、Nelsonは、10月25日の金子貞子(委員会委員・文部省事務官)との会見の中で、委員会がほとんど何も成し遂げていないように思えるのはなぜなのかと尋ねています。金子は、次の4点、①委員の中に大きな意見の相違がある、②委員にはほかの仕事もあり頻繁に会議へ出席できない、③予算の不足、④委員の多くがかなりの高齢、の要因によって成果が上がっていないと答えています。これに対しNelsonは、2～3名の委員で「要項」を改訂し、委員会の最終合意のために再提出することを提案し、金子はそうにする

と賛同しています。また、この時点で委員の2名が死去していたようで、Nelsonはこの空席をできるだけすみやかに、比較的若く、委員会の活動に時間を注げる人物で埋めるように提案しています⁽³⁾。

その後、「要項」の改訂作業は1か月足らずで完了したようです。11月16日の会見では、改訂した「要項」に委員会が同意し、近く翻訳されEducation Divisionに提出されるだろうと山室がNelsonに報告しています。そして、12月1日に「要項」の最終版が提出され、12月4日にEducation Divisionの最終的な承認を受けています。安藤執筆の小冊子については、12月27日に改訂版が提出され、1949年1月4日にEducation Divisionの最終的な承認を受けています⁽⁴⁾。

以上のような経緯ののち、「要項」は1949年1月28日に各都道府県教育委員会あてに通牒され、4月には『文部時報』859号に掲載されました。さらに、6月には、安藤が小冊子として執筆していた「性教育のあり方」も収録された形で、社会教育連合会編・印刷局発行の『純潔教育基本要項(附 性教育のあり方)』として販売されました。

【注】

- (1) 委員会は「要項」や小冊子の執筆のほか、ラジオ放送の企画、スライドや紙芝居の作成の企画、性教育に関する映画を作成している製作会社への助言などを活動内容に含んでいたようですが、紙幅の都合上、今回は「要項」と安藤執筆の小冊子を中心に述べます。
- (2) Sex Education. 1948年7月12日 CIE (B) 2523. Pamphlet on Sex Education. 17月16日 CIE (B) 2523.
- (3) General Principles of Purity Education. 9月10日 CIE (B) 2521. Principles of Purity Education. 10月4日 CIE (D) 235. Activities of Purity Education Committee. 10月25日 CIE (B) 2520. 死去した2名とは、前田若尾(1947年没)と花木サチヲ(1948年没)を指すと考えられます。
- (4) Activities of the Purity Education Committee. 11月16日 CIE (B) 2515. Statement of Principles of Purity Education. 12月1日 CIE (B) 2515. Principles of Purity Education. 12月4日 CIE (B) 2515. Proposed Pamphlet on Sex Education. 12月27日 CIE (B) 2520. Pamphlet on Sex Education. 1月4日 CIE (D) 290.

「クローゼットを出ろ」と教えること

日本では毎年、百数十万人が性的初体験をします。このときに必要なのは性のモラルではありません。性の知識です。HIV/AIDS 禍の初期にさんざん議論されて出た結論は、これはジャーナリズムの課題ではなく教育の問題だということでした。関心の高いニュースで社会的啓発を進めるのも大切でしょうが、肝心なところは日々の地道な教育的課題だということです。

日赤の献血で HIV 検査をすり抜けて輸血された陽性血漿で60代の男性がHIVに感染してしまいました。感染血液を献血したのは30代の男性間性交者(MSM)でした。HIVは血液中の抗体の有無で感染を調べるので、その抗体が検出できるほどに増殖するまで約8週間はウィンドウ・ピリオドといってウイルス陰性を示します。この男性は他の男性と性的接触をしてすぐに献血を行ったために、血液中にまだ抗体が来ていず、検査では感染陰性と出たのです。

新聞報道が出てから、陽性当事者団体が日赤の対応に公開質問状をだすなどの反応が現れました。「献血者のモラルや個人的責任に帰すような報道について大変懸念」「保健所検査を知らない、陽性なら教えてもらえらると思っている（事例も聞く）人々が少なからずいることを考慮する必要がある」などと訴えています。平たく言えばつまり、いかにも「ゲイはHIVの検査に献血を利用している！」的ニュアンスの報道も何件かあったが、それはホモフォビアではないか、これは差別や偏見を助長するのではないか、という懸念なのでしょう。

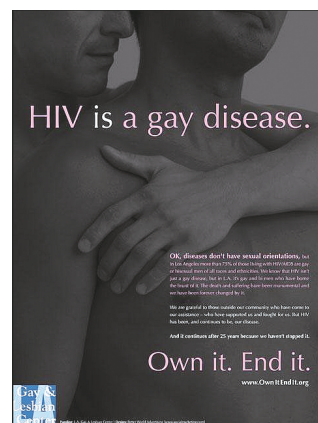
それはとても大切な指摘です。しかしそういうことを言い続けてもう30年以上経ちました。日本のホモフォビアの状況はその間あまり変わっていないのかもしれませんが、変わっていないのは一方で同性愛者たち自身が内なるホモフォビアに囚われて（それだけではありませんが）自身のクローゼットから抜け出せない

いでいるせいでもあります。クローゼットから出ないで、どうして世間のホモフォビアに抗議することができるのか？ 匿名では切実ささえも匿されるのです。

エイズ禍と戦うのも同じです。顔を出すことでエイズフォビア（嫌悪症）に真っ向から異議を唱えることができます。理屈はわかってるんだけどね……そう言い続けて30余年。その間に欧米と日本の男性間性交者のHIV感染率は明らかな差を見せました。

今回の30代の当該献血者は明らかに直前に男性と性的な接触をして、それを隠したまま献血をしています。その動機が「ひとの役に立ちたい」というものだったのか「HIVの検査を兼ねたい」というものだったかはわかりません。けれど、他人と性的接触をした後の血液がなんらかの病原体の感染源になる恐れがあるということを「知らない」30数年の人生は、批判されて然るべきでしょう。

エイズ禍対策はながく「怖くない、ひとにはなかなか感染しない、だから差別はしないで」という一般向けメッセージと、その一方で「怖い、性的接触で感染する、だから注意して」という感染リスク行為者向けのメッセージの“二枚舌”を使ってきました。そんな中で米国ではゲイコミュニティの中で男性間性交者（ゲイとは限りませんが）に向け「HIVはゲイの病気だ」と取敢えて挑発的に突きつけるメッセージまで現れました（写真）。



このようなメッセージが日本社会で有効か、あるいは誤解を助長するので危険かは別にして、性の知識は性に関するさまざまなクローゼット（秘密）を解き放すことからしか得られないのは確かです。それは性教育でぜひとも触れていただきたい核心なのです。

きたまるゆうじ ニューヨーク在住（20年）ジャーナリスト／作家／元・中日新聞（東京新聞）ニューヨーク支局長。

「ありのままのわたしを生きる」ために



第33回

Jさんと子どもたち

土肥いつき

京都の公立高校教員。24時間一人パレード状態のMtFトランスジェンダー。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

とてもきなくさい昨今です。でも、学校の廊下で会う子どもたちは「テレビで見たで」「許せへん」と言ってくれます。あきらめずに伝え続けてよかった…。

閑話休題。

2004年8月のある日、一本の電話がかかってきました。電話の主は、NHKの福祉番組「福祉ネットワーク」のプロデューサーをしているNさんでした。当時は「性同一性障害者の性別の取扱いの特例に関する法律」が成立した翌年で、ようやく「性同一性障害」という言葉が一般的になりはじめた頃でした。Nさんは、さまざまな当事者の姿を取材することで、性同一性障害への理解を広めようと考えていたようです。わたしには、「パートナーや子どものいる当事者」を探して連絡をされたようでした。取材を受けるかどうか迷いましたが、頼まれると断れない性格なので、とりあえず取材を受けることにしました。予備取材のあと、Nさんから「できれば配偶者とお子さまにも取材させてほしい」というメールが来ました。Jさんに相談すると、Jさんも「性同一性障害への理解を広めるためならば」と、取材に応じることに同意しました。

取材の過程で、いままであまり知らなかった、Jさんと子どもたちのことを知ることができました。

実は、わたしから子どもたちに直接自分のことを話したことはほとんどありません。子どもたちにわたしのことを伝えたのはJさんでした。上の子どもYは、小学校2年生の時、2階の自分の部屋で宿題をしている時に、いきなり1階に呼ばれて、こう告げられたそうです。「世の中には身体が男でも心が女だったり、女みたいだったりする人もいるんやで。あなたのお父さんもそういう人なんや。でも、お父さんはすごく立派な人なんやで。そんな人をお父さんに持って、あなたは幸せやなあ」。そんなYは、例えば小学校6年生の頃、塾の書類にあった保護者の性別欄を「どうしても書かなければなりませんか」と聞いて空欄にしたことがありました。下の子どもRにも、小学校低学年の時、Jさんは同様の言葉でわたしのことを伝えました。

しかし、当時人口わずか9000人の町にトランス前から住み、2003年には小学校のPTA会長もしていたわたしは、当然のことながら地域で目立つ存在でした。Yには小学校4年生の時、同級生に「おまえの父ちゃん、おかま」と言われてけんかになったという経験があります。当時のことを振り返って、Jさんは、「テレビに出ることへの不安はあったけど、自分のところに降り掛かってくる火の粉であれば振り払う自信はあった」と言いました。しかし、実際に火の粉が飛んでいった先は子どもたちでした。番組放送後も、Yに対するいじめは続きました。中学では、Yに近づいてきて「性同一性障害」とだけ言って逃げるとことがはまりました。Yは「その時は舌打ちで返したけど、『おれもおやじも中傷されるいわれはない』と腹が煮える思いだった」と言いました。

「福祉ネットワーク」以降、取材を受けたのは関東限定のものだけでした。唯一全国放送で取材を受けた「ハートをつなごう」では子どもの顔にぼかしを入れてもらいました。しかし放送後、今度はRがいじめの標的になりました。Jさんは、Rに「あんたが負けたらどうする」「これからもあるで。一番大きいのは、あんたが結婚する時や」と励ましながら、ひたすら外を飛びまわるわたしに代わって、教員や親に理解を求めるために何度も学校や相手の家に足を運びました。

しかし、YもRも、わたしのことを悪く言ったことは一度もありませんでした。Jさんは「うちの子らは、ふたりともお父さんのこと大好きやしな。あんた、幸せやな」「たぶん、子どもたちが小さい時に、年に何回もキャンプに連れて行ってくれたり、あんたがいっぱい一緒に時間を過ごしてくれたからやろな。そんなベースがあったんとかうかなあ」といつも言ってくれます。そんなJさんのおかげで、家の中には穏やかな空気が流れていました。「この空気をこれ以上壊したくない」というJさんの思いを受けて、2007年、これも関東限定だった朝日新聞の特集「家族」を最後に、家族のことで取材を受けるのはやめました。

BOOK GUIDE

今月のブックガイド

裸体アートをめぐる歴史旅

何年前か、JRの駅に張ってあった東北のお祭りのポスターが、クレームで外される件があった。被写体の中年男性の体毛やらが問題とされたのだが、そこに「性的な」不快感が見い出されたのは間違いない。かつてなら男性の身体が、ましてや祭りというハレの場でのそれが、不快と批判を受けることなどなかったはずだが、近年は締め込み姿にすら世間の風当たりは強くなってきている。これは男性の身体が性的に視られる記号へと変容してきた顕われであることは間違いない。

近代に入ってから、裸の男をめぐる社会の取り扱いには、紆余曲折があった。そんな歴史を掘り起こしてくれたのが、木下直之著『股間若衆』である。著者は東京大学で教鞭をとる研究者であるが、タイトルの通り文体も洒脱な読み物となっている。

きっかけは赤羽駅前であった。そこに裸で立つふたりの青年の彫刻に、著者はふと疑問を持った。これが生身のヌードであれば当然のことながら逮捕されるはずだ。そして「改めて美術品のふたりに目を向けると、本当に全裸なのか、それともパンツだけ穿いているのか、はたまたパンツが身体と渾然一体と化してしまったのか判然としない。いかにもそれは『曖昧模っ糊り』としたままである」。

その造形された股間への違和感から、著者の、股間若衆もとい男性の裸体表現と、社会との関係をたどる旅がはじまる。

前近代には春画の文化が享受された日本であるが、明治期には、黒田清輝の《裸体婦人像》が額縁ごと下半分を布で覆われ展示された「腰巻き事件」に見られるように、裸体画などに対する官憲の取り締まりは厳しかった。それは男性裸体彫刻でも同様で、朝倉文夫



股間若衆

木下直之著
新潮社
1,890円（税込み）

の《闇》という作品などは、股間表現への修正を露骨に当局から求められたという。

そんなこんなで近代の美術家たちによって下半身が薄い布で覆われたり、性器の上にイチジクの葉をのせられたり…の試行錯誤の果てに、あの「曖昧模っ糊り」な股間造形も生まれた。

そういった流れを具体的な事例を拾い上げながら振り返っていくのが本書の構成である。興味深いのは、男性の裸体が美術館などの屋内から外に展示されるようになっていったのはおおむね戦後で、軍服姿の銅像などが撤去されていくと交替するようになされたという事実。つまり、そこには軍服を脱いで丸腰の人間になることで平和を願う、という思想的な面があったわけだ。

そして無視できないのが、芸術や平和という名目の裏にただよっているホモセクシュアルな欲望の影。本書にも男性同性愛者向けの雑誌や会員誌を扱った章があるが、男性の裸体を表象した作品群のなかには、（著者は名指しこそしないが）そうしたエロスの動機を確にかにかいみ見ることができる。時を下るとともに男性の身体への欲望が社会の表面に現れ出ることとなるわけだが、ピックアップされている三島由紀夫が自ら被写体となった細江英公の写真集などは「ゲイ・アート」の先駆けといえまいか。

性的なアートへの規制は、政治的、統制的な技術からの要請でなされるばかりではない。一度日常から排除したものを取り込むことで成立するエロティシズムの原理そのものからも、その存在が緊張にさらされる。つまるところ、ヤバくないエロはエロではない、ヤバいから興奮する、ということだ。

とすれば、本書が切り取ったアートをめぐる受容と拒絶の境界線こそが、私たち自身の性的欲望を象っているともいえるだろう。

（作家 伏見憲明）

▶▶ **2014年2月11日** (火・祝日) 13:00 ~ 16:30 ◀◀

東京性教育研修セミナー 2014 冬 HIV と性の教育セミナー

いつでも、どこでも、だれにでもできる性教育 ～若者たちに伝えたいメッセージ・伝える工夫～

HIV/STI の予防、避妊、デートDV、性の多様性の理解、エトセトラ、性教育の課題は増えるばかり。でも使える時間は少ないし、病気や多様性については「他人事」でおわってしまいそう。そんな声が現場の先生たちからたくさん聞かれます。「性教育の時間はあったけれど内容はあまり覚えていない」大学生の多くがこういいます。

でも、どのテーマでも「自分のことかもしれない」と気づく工夫やヒントがあります。わかりやすくピンときて、どのテーマにも共通する基本メッセージと伝える工夫を考えてみませんか。

内容 講話 「若者たちに、だれもが伝えられる具体的なメッセージ」池上千寿子 (ぶれいす東京)
発表 「新版 Sexual Health Book 開発プロジェクトから」
— 性の健康と多様性をもちこんだ新教材 (Sexual Health Book) の紹介
グループワーク : メッセージを伝える工夫あれこれ

会場 日本性教育協会セミナー室 (東京都文京区小石川2-3-23 春日尚学ビル B1)

参加費・申込み先等

参加費: 1,000 円。定 員: 30 名 (事前登録、先着順)。

申込み先: ぶれいす東京性教育セミナー係 E-mail office@ptokyo.com

対 象: HIV/エイズ及び性教育に関心のある方、保健師、助産師、教師、研究者、大学院生、学生等。

主 催: 特定非営利活動法人ぶれいす東京 協 賛: 日本性教育協会

1/18 (土)

13:00

17:00

アーニ「性を語る会」新春シンポジウム

親子で話そう性のこと愛のこと～お父さん、お母さん、あなたは子どもと話していますか？～

【会場】 アーニホール

【問い合わせ先等】 〒158-0097 東京都世田谷区用賀 3-5-6 アーニ出版内「性を語る会」事務局
TEL 03-3708-7326 (祝日を除く月～金曜日 9:00 ~ 17:00)

1/25 (土)

1/26 (日)

“人間と性”教育研究協議会 第28回 理論と実践講座

【テーマ】 「見逃さないで! 『性的いじめ』～学校における性暴力～」

【内容】1日目: 講座「学校の安全神話の崩壊～性的いじめ・スクール・セクハラ」亀井明子 (スクール・セクハラ・防止全国ネットワーク)、「ネットの情報が引き起こす未成年の性トラブル」遠藤美季 (エンジェルアイズ)、ほか。**2日目:** 「スポーツ界の常識は社会の非常識～部活でのセクシュアルハラスメント～」山田ゆかり (早稲田大学スポーツ科学部)、ほか。

【会場】 埼玉大学総合研究棟1F シアター教室 (埼玉県さいたま市桜区下大久保 255)

(JR 京浜東北線北浦和駅、埼京線南与野駅、東武東上線志木駅下車、各駅よりバスで「埼玉大学」下車)

【参加費・問い合わせ先等】 参加費/両日参加: 一般 6,000 円、会員 5,000 円、学生 2,000 円。

1日参加: 一般 3,500 円、会員 3,000 円、学生 1,000 円。定員/200 名 (申込み締め切り 1月19日、定員になり次第締め切り)。

問合せ先/〒151-0071 東京都渋谷区本町1-7-16 初台ハイツ1006号 一般社団法人“人間と性”教育研究協議会

TEL 03-3379-7556 FAX 03-3379-7561 (電話は火・木曜の17:00 ~ 20:00 受付) URL <http://www.seikyokyo.org/>

「若者の性」白書

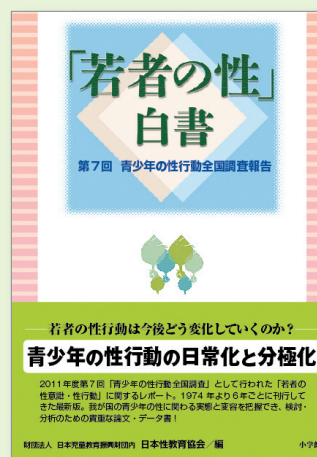
好評
発売中!!

第7回 青少年の性行動全国調査報告

2011年度第7回「青少年の性行動全国調査」として行われた「若者の性意識・性行動」に関するレポート。1974年より6年ごとに刊行してきた最新版。我が国の青少年の性に関わる実態と変容を把握でき、検討・分析のための貴重な論文・データ書！

◆主な内容◆

- 序章 第7回「青少年の性行動全国調査」の概要
- 第1章 青少年の性行動の低年齢化・分極化と性に対する新たな態度
- 第2章 欲望の時代からリスクの時代へ
—性の自己決定をめぐるパラドクス—
- 第3章 青少年の家庭環境と性行動
—家族危機は青少年の性行動を促進するのか—
- 第4章 消極化する高校生・大学生の性行動と結婚意識
- 第5章 青少年にみるカップル関係のイニシアチブと規範意識
- 第6章 高校生・大学生の避妊に関する意識と行動
—避妊行動の分化に着目して—
- 第7章 現代日本の若者の性的被害と恋人からの暴力
- 第8章 自慰経験による女子学生の分化
- 第9章 性情報源として学校の果たす役割
—性知識の伝達という観点から—
- 付表Ⅰ 「青少年の性に関する調査」調査票
- 付表Ⅱ 基礎集計表（学校種別・男女別）



編／財団法人日本児童教育振興財団内
日本性教育協会
発行／小学館

本体2,310円（税込） ● A5判256ページ
全国の書店にてご購入できます！

JASE 性教育・セクソロジーに関する資料室

資料室について

JASE 資料室は国内外の性教育、性科学等に関する文献資料を収集している開架式資料室です。文献資料の数は約5万点以上、現在も日々、増え続けています。性教育、セクソロジーに関する調査、研究のためにご利用いただけます。人間の性に関心がある方、ぜひ足をお運びください。

【閲覧】 必ず事前に電話で予約が必要です（tel 03-6801-9307）。貸出業務は行っておりません。

【開室日・時間】 月～金曜日 10：30～17：30

【休室日】 土・日曜日、祝日、年末年始 ※その他、会議等で臨時に休室することがあります。

【コピーサービス】 コピー料金は用紙サイズにかかわらず1枚10円です。著作権法の許容する範囲で行うものとします。

<http://www.jase.faje.or.jp/pub/archive.html>

資料室 利用方法

収集文献 ・資料

統計・調査報告書、ジェンダー・フェミニズム、性教育一般・性教育の歴史的資料、国内雑誌、障害者、セクソロジー（自然科学系、人文・社会学系）、民俗学・文化人類学・風俗、性研究史・性学史、教科書・指導書・学習指導要領、幼児期～青年期、国内学術誌、国際（海外団体資料・海外学術誌）、高齢者・家族問題、文学・評論・エッセイ・文庫・新書、官公庁資料、JASE 刊行物、映像資料、個人論文、雑誌記事、新聞記事、絵本・写真集・マンガ、江幡・篠崎・朝山・石川・ダイヤモンド文庫、ほか。

<http://www3.jase.faje.or.jp/cgi-bin/search1.cgi>